

情報科学研究科

I	研究水準	研究 14-2
II	質の向上度	研究 14-3

I 研究水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

1. 研究活動の状況

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準を上回る

[判断理由]

「研究活動の実施状況」のうち、研究の実施状況については、教員一名当たりの論文数が平成 16 年度は 2.2 件、平成 17 年度は 2.3 件、平成 18 年度は 3.0 件と伸びている。学会での論文発表数は、毎年平均教員一名当たり約 5 件以上となり、活発な研究が行われている。また、学術論文のうち英語文献の比率は、各年度とも 6 割を超えており、IEEE、電子情報通信学会等長期の貢献に対する賞、論文賞を含め毎年 20 件を超えている。研究資金の獲得状況については、共同研究、受託研究を合わせて、毎年 40 件を超えている。また、グローバル COE プログラム「アンビエント情報社会基盤創成拠点」が採択されている。科学研究費補助金の採択状況は各年度平均約 60 件であり、高い水準を保っている。外部資金総獲得額は、平成 19 年度 10 億 4,900 万円（165 件）で、教員一名当たりの年間平均額が約 1,000 万円で推移し、活発な研究活動が展開されていることなどは、優れた成果である。

以上の点について、情報科学研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究活動の状況は、情報科学研究科が想定している関係者の「期待される水準を上回る」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

2. 研究成果の状況

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準を上回る

[判断理由]

「研究成果の状況」について、学術面では、インパクトファクターが高く、国際的にも

高く評価できる国際雑誌に 18 件の論文が掲載され、さらに、国際会議や学会で最優秀賞の受賞が 10 件ある。社会、経済、文化面では、情報科学の基盤であるソフトウェア、ハードウェア、通信の分野で、ソフトウェア開発のための部品の重要度を求める技術や開発プロジェクトのリスク予測、車々間通信に効果的な通信プロトコル、コンパクトかつ高機能なカメラの開発等社会的に有用性の高い研究成果を得ている。これらの状況等は、優れた成果である。

以上の点について、情報科学研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究成果の状況は、情報科学研究科が想定している関係者の「期待される水準を上回る」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

II 質の向上度

1. 質の向上度

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

相応に改善、向上している

[判断理由]

「相応に改善、向上している」と判断された事例が 3 件であった。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間終了時における判定として確定する。